

原市から、七里（約三十キロメートル）離れた榎の宿（現大津市和邇）まで乗せた日の実話に基づいたお話です。

又左衛門は往復十四里（約六十キロメートル）も馬を引いて歩き、一日の仕事を終えた時、大金の忘れ物に気づきます。飛脚が困っているだろうと考え、疲れた体も厭わず、榎まで一心に走って届けました。宿屋へ届けた時の、誠意とすがすがしい言動が、飛脚やその場にいた人々に大きな感銘を与えました。

この話には、「正直馬子」あるいは、「正直馬方又左衛門」等、ほとんど「正直」が付けられてきました。一般の庶民が大金を手にする機会は、ほとんどなかったというこの時代です。大金を目にすれば、心が揺れるのが当たり前であったことを背景に考えますと、この話が、驚きと大きな感動を持って語り継がれ、馬方又左衛門に「正直」という称賛の言葉が付けられたと思われます。

しかし、この紙芝居では、題名に敢えて「正直」という言葉を付けませんでした。馬方の行為は、もつと奥深い「相手への思いやり・真心・誠意・知行合一の精神」に基づく行為であると考えたのです。そこで一つの価値観でまとめず、子どもたちの豊かな感性で、又左衛門の「良知の心」を感じ取ってほしいと願っています。

（紙芝居）

①ここは、びわ湖の西岸、「川原市」

（現高島市新旭町安井川）という宿場



（駅のこと、宿屋が多い）です。今日も、旅人や町の人で、にぎわっています。又左衛門は、この職場で、馬にお客さんを乗せて運ぶ馬方の仕事をしています。

②ある日、又左衛門は、朝早くこの川原市から、「榎の宿」（現 大津市和邇）まで、お客さんを乗せて行くことになりました。

又（又左衛門）「客さん、それでは出発させてもらいます。」

飛脚「馬方、どうかよろしく頼みますよ。」

又「お客さんは、びわ湖の方ははじめてですか？」



飛脚「私の仕事は、飛脚ですから、こちらの方は何度か来ていますよ。（間をおいて）しかし、このびわ湖は、いつ見ても大きくて美しいですな。」

こんな話をしながら、八里ばかり（約三十キロメートル）南の「榎の宿」の宿屋まで、お客を送りました。又左衛門は、馬の首をなでながら、「さあ、もう一度川原市までがんばろうや」と、声をかけ、来た道に戻って行きました。…（次のページを半分まで 抜く）…

③川原市までようやく戻った又左衛門は、「今日は一日中、よく歩いたな。ご苦労さんやった、疲れたやろう。」と、馬にやさしく声をかけ、水を飲ませました。空は夕焼けで赤くなっていました。又左衛門は、馬の背中から鞍を下ろしたところ、どさつと重い包みが落ちてきました。

又「あれっ、何だこれは…？」

…（残り、半分をさつと抜く）…又左衛門は、その袋を拾い、袋の中を見



て、「わあ」と、大きな声を上げました。中には、たくさんのお金が入っていたのです。数えてみると…、

又「わあ、二百両（現在の約二〜三千万円）もある。たいへんや。」

④又「どうしてこんな所にお金があったんやろう？あつ、先ほどの飛脚さんかな？なくしたらあかんと思つて、しまい忘れたんやろうか。きつと、そうや。たくさんのお金をなくしたと思つて、困っているぞ。早く届けてやろう。」



又左衛門は、急いで馬にえさを食べさせ、休ませました。それから、大切な小判の入った袋をふるしきにしつかりと包み、自分の体

にくくりつけ、ふたたび榎に向かって、走り出しました。赤い日は沈み、周りはすっかり暗くなりました。

しばらく走ると、又左衛門の足は、いなくなってきました。急いで出て来たので、腹も減ってきました。足が思うように進みません。又左衛門は、くじけそうになりましたが、飛脚のことを考えて、自分を励まして走り続けました。

⑤さて、榎の宿では、飛脚が体をぶるぶると震わせながら、宿屋の主人や、お客たちに泣きつくように言っています。

飛脚「お金がない。どこかで落としてしまったのか。いくらさがしても、お金の入った大事な袋がないのです。加賀のお殿様から預かった大事なお金です！。ああ、どうしよう。お金が出でこなければ、私は打ち首



になる。私ばかりか、家族も重い罪になってしまふ。」宿の主人は、驚いてたずねました。主人「一体、その袋には、いくら入っていたのですか。」

飛脚「二百両です。」

主人「えっ、二百両も！」

宿の主人もまわりにいた泊まり客たちも、こしが抜けるほど驚きました。

みんな「たいへんだ、みんなで捜してあげよう。」